

TEAM MUGEN

シリーズ名: 2016 年全日本スーパーフォーミュラ選手権 シリーズ第 7 戦
大会名: 2016 年全日本スーパーフォーミュラ選手権 最終戦 JAF 鈴鹿グランプリ

距離: RACE1 5.807km × 19 周 (110.333km)

RACE2 5.807km × 35 周 (203.245km)

予選: 10 月 29 日(土) 晴れ・観衆: 13,000 人(主催者発表)

決勝: 10 月 30 日(日) 晴れ・観衆: 21,000 人(主催者発表)

TEAM無限、厳しいシーズンを終える。

全日本スーパーフォーミュラ選手権 シリーズ最終戦(第7戦)が、三重県鈴鹿サーキットで開催された。TEAM無限は、#16 山本尚貴をドライバーに、このレースへ参戦した。

シリーズ最終戦は特別フォーマットとなり、決勝レースは19週のRACE1 と35週のRACE2の2レース制で開催される。それに伴い、予選の形式と選手権ポイント配分も通常とは異なる方式となった。

10月29日(土)

■フリー走行

#16 山本 6位 1分38秒486

29日土曜日午前9時10分から1時間にわたりフリー走行が行われた。鈴鹿サーキットは前日までの雨の影響でコースのところどころに濡れた箇所が残ってはいるが、概ねドライコンディションである。

TEAM無限と#16山本は、同じ鈴鹿サーキットで行われたシリーズ開幕戦でポールトゥフィニッシュの完勝を遂げている。今回は、快調だった開幕戦のセッティングを元に仕上げたマシンを持ち込んで走行を開始した。

しかし開幕戦と同等のタイムは出るものの、#16山本はそのフィーリングには満足できず、持ち込みセッティングの改良に取り組みながら走行を続けた。#16山本はトータルで17周を走行し、トップタイムから0秒404後れの1分38秒486を記録し、6番手でセッションを終えた。



2016 Race Report TEAM 無限

■公式予選

#16 山本 (Q1:9位 1分38秒288 Q2:11位 1分38秒212 Q3:DNS)

3回のセッションにわたるノックアウト方式の公式予選は午後2時15分から始まった。空は快晴、コースはドライコンディションである。今回の予選では、2レース制に伴い変則的な規則が適用された。まず20分間のQ1セッションの結果でRACE1の全スターティンググリッドを決定し、上位14台がRACE2のスターティンググリッドを決める7分間のQ2セッションに進出する。このとき残りの5台はRACE2のグリッドがそのまま決定する。Q2セッション上位8台が7分間のQ3セッションに進出し、残りの6台についてはQ2セッションの順位でRACE2のスターティングが決まる。そしてRACE2の上位8つのグリッドがQ3セッションで争われる。

Q1セッションに臨んだ#16山本は、マシンの調子に納得ができる状態ではなかった。挙動が不安定で限界を究めるタイムアタックができない状況なのだ。それでもいつものようにセッション残り7分を切ろうというタイミングでニュータイヤを装着、アタックをかけた。

結果は1分38秒288の9番手。Q2進出は果たしたものの、開幕戦ならばトップレベルのタイムであるにもかかわらずベストタイムを記録した選手からは0秒835の差を付けられている。RACE1のスターティンググリッドはこれで9番手と決定した。

なんとか操縦性を好転させようとチームは短いインターバルでマシンの微調整を行い、#16山本をQ2に送り出したが、マシンの状態は大きく変わることなく、#16山本はマシンが不安定なままアタックに入り、1分38秒212とQ1でのタイムを更新はしたものの、11番手に終わり、Q3進出はならず、RACE2のスターティンググリッドは11番手で決定した。

10月30日(日)

■決勝RACE1

#16 山本 19位(18周-1周遅れ ベストラップ1分40秒347)

2レース制の変則開催に伴い、通常のレースフォーマットで行われる午前中のフリー走行セッションは設けられず、午前9時にはRACE1のスタート進行が始まった。天候は前日に引き続き快晴で朝の



2016 Race Report TEAM 無限

空気は気温19度と引き締まっている。

チームは前日の予選終了後、マシンのセッティングをさらに改善し、決勝RACE1に先駆けて行われた8分間のウォームアップ走行で#16山本は、好感触を得ていた。タイムは5周を走って1分40秒432を記録、出走19台中2番手であった。

午前9時45分、RACE1のスタートが切られた。9番手からスタートした#16山本は、集団の中で順位を上げようとコース取りするが、2コーナーを過ぎようというときに内側にいた選手に押し出されるように接触、オーバーランした。

このとき、相手のマシンのフロント翼端板が#16山本のマシンの右フロントタイヤに当たってタイヤが破損してしまい、#16山本はコースに復帰したがスロー走行を余儀なくされた。#16山本はそのままピットイン、急遽フロントタイヤのみを交換してレースを続行したが、ほぼ周回遅れとなってしまった。

その後#16山本はほぼ単独のまま短いレースの残りを走りきって1周遅れの19位でフィニッシュした。タイヤ交換後の#16山本は快調で、レース全体のベストラップでは2番手となる1分40秒347（ファステストラップから0秒126後れ）を記録した。

■決勝RACE2

#16 山本 リタイヤ(28周-7周遅れ ベストラップ1分42秒422)

レースウィークが始まってから#16山本はステアリングの重さが気になっており、RACE1でも変わらなかったため、チームはサスペンション関連の部品を念のために交換するなど万全の体制を整えてRACE2に臨んだ。RACE2はフルタンクで走りきれるかどうかギリギリのレース距離の35周という設定で、レース中にはタイヤ交換のピットストップが1回義務づけられる。

引き続き快晴の空の下、午後2時から8分間のウォームアップが始まった。レースを無給油で走りきるためフルタンクにした#16山本はRACE1のときほどタイムが上がらない。午後2時45分、決勝RACE2が始まった。

レースではピットインのタイミングが勝負のポイントだった。チームはレース序盤でのピットストップが



2016 Race Report TEAM 無限

有利だろうと考えていたが、最終的な決断はスタートした後の#16山本の判断にまかされた。集団の中に取り込まれた#16は1周目でのピットストップを決意、チームに伝えると1周目にピットへ向かった。

チームは迅速な作業で4輪を交換、給油は行わずに#16をコースへ復帰させた。3周目、#16山本が見かけ上12番手につけた。だがやはり前のマシンに接近すると空力の影響が出て追い抜きには至らない。

15周目には上位車両がリタイヤ、16周目にはコース上で前走車を追い抜いて#16山本は10番手へ、またピットインを遅らせて上位を走り続けた選手が18周でピットインをしたため#16はその選手の前にも出て19周目には9番手へ進出した。

しかし1周目にタイヤを交換した影響が徐々に#16山本を苦しめ始めていた。タイヤが消耗してマシンの安定性が低下し、ふらつき始めていたのだ。24周目にコース上で生じたアクシデントを処理するためセーフティカーが入りペースランしたので#16山本にとってはわずかながらも救いになった。

レースは28周目から再開された。この時点で#16山本は9番手、後方からタイヤ交換をしたばかりの選手に攻め立てられるレースになった。ところがレース再開直後の28周目最終コーナーで#16山本がタイヤをコース外へ落とした影響でスピンしてコースオフ。#16山本はそこでレースを終えることになってしまった。

#16 山本はシリーズポイントを加算することができず、通算 15.5点でシリーズポイントランキングでは首位と17.5点差の7位でシーズンを終えた。TEAM無限はチームポイントランキング6位であった。

■山本尚貴選手コメント

得意としていた鈴鹿なので期待もしていましたがその反面、開幕戦以外は今年全レースで思うようなレースができていないので不安だった部分もあって、どちらかというところちが当たった感じです。開幕戦と同じセットでも同じフィーリングはまったく得られませんでした。コンディションが違うのでフィーリングも違ってくるのは当たり前なんです、あまりに挙動が違いすぎてまともにアタックすることもできないくらい不安定で思い切って攻めきれませんでした。とはいえなんとか修正して苦しい中でもレースで順番を



2016 Race Report TEAM 無限

上げて帰ってくるのがドライバーの真価だと思うので、それができなかったことを反省しています。1年間チームはいろいろな面で頑張ってくれて特にセットの面ではエンジニアも一所懸命考えてくれました。でもドライバーとして期待に応えることができませんでした。RACE2のスピンは完全にぼくのミスです。クルマがふらつき始めていたこともあって、完全にレースに集中して走れていなかったように思うので、自分の力不足を痛感しました。簡単ではありませんが、なんとか流れを変えて来年に備えたいと思っています。

■手塚長孝監督コメント

調子が良かった開幕戦の仕様で走り出しました。しかしながらコンディションも違い、若干の修正のみで開幕戦のレベルまでは行けるのですが、そこから先へ行くためには何か変えなくてはいけない状況でした。結局、(仕様変更は)予選には間に合わず、Q2で敗退してしまいました。決勝 RACE1に関しては、クルマを良い状態に持って行けましたが、スタート地点での他車との接触、タイヤのダメージ、そして緊急ピットによるフロントタイヤの交換、その後、周回遅れになったものの、トータルで2番目のベストタイムを出す事が出来ました。RACE2に向けて燃料も重くなるという事で、セット変更をしたのですが、それがあまり良い方向へは行かなかったようです。メカニックがピットイン作業をうまく決めてくれたおかげで何台か前へ出る事が出来ましたが、RACE1とは違いバランスを崩してしまい、ペースを上げ切る事が出来ないままシーズンを終える事となりました。最後のレースだけに特別な思いでスタッフ一同 優勝を目標にしていたのですが、残念な結果しか残すことが出来ませんでした。開幕の1勝だけで終わってしまったのが残念であり、反省点でもあります。応援していただいた皆様には申し訳ない気持ちで一杯です。今後に向け反省点を全て見直すと共に、新たな取組にトライしていかなければならないと思っております。今年も一年間、共に戦った皆様には感謝します。そして、このチームの関係者、Honda の方々、スポンサーの皆様とファンの方々には深く感謝申し上げます。勝ち続ける事を念頭に前進していきますので、引き続き応援の程よろしくお願い申し上げます。

TEAM無限 SUPER FORMULA公式サイト

<http://www.mugen-power.com/motorsports/sf2016/index.html>

SUPER FORMULA公式サイト

<http://superformula.net/>



2016 Race Report TEAM 無限

